

都農町文化財調査報告書第5集

# 森 遺 跡

中部土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

宮崎県児湯郡

都農町教育委員会

都農町文化財調査報告書第5集

# 森 遺 跡

中部土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

宮崎県児湯郡

都農町教育委員会

## 序

都農町教育委員会では、平成4年度中部土地区画整理事業に伴い、平成4年7月6日より同年8月31日まで、都農町明田地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施いたしました。その記録が本調査報告書であります。

この発掘調査の結果、弥生時代の遺物や住居跡、歴史時代の遺物や遺構が検出されました。

これらの文化財を適切に保管し、様々な分野で資料として広く活用されることが、郷土の文化財に対する愛護の精神を育成していくものであるとともに、後世に伝え残すための最も有効な手段と考えます。本書が今後の生涯学習に幅広く御活用いただければ幸いります。

なお、調査に際し、御協力いただきました関係各位に深甚の謝意を表しますとともに、積極的な御尽力をいただきました地元の方々に心から厚く感謝申し上げます。

平成5年3月

都農町教育委員会

教育長 守部 寛

## 例　　言

1. 本書は、都農町の中部土地区画整理事業に伴い、平成4年度に実施した森遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は、児湯郡都農町大字川北4515番地外（都農町大字川北字森）である。
3. 調査の期間は、平成4年7月6日から同年8月31日まで実施した。
4. 現地の実測図は吉永真也が行った。
5. 出土遺物については、石川悦雄氏、谷口武範氏（県教育委員会文化課）の御教示を得た。
6. 遺物の復元作業、実測、製図及び写真撮影は吉永が行った。
7. 本書の執筆、編集は吉永が行った。
8. 出土遺物は都農町教育委員会で保管している。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と調査概要	2
第1節 立地と環境	2
第2節 基本層序について	5
第3節 調査の概要	5
第3章 調査の成果	6
第1節 遺物と遺構	6
第4章 まとめ	14

# 挿図目次

第1図 森遺跡周辺の分布図	3
第2図 土層模式図	5
第3図 土層断面図	7
第4図 遺物・遺構分布図及び遺構配置図	8
第5図 2号住居実測図	10
第6図 弥生遺物実測図	11
第7図 中世遺物実測図	13

# 表目次

第1表 遺跡地名表	4
-----------	---

# 図版目次

図版1 調査区近景、1号住居	15
図版2 2号住居、溝状遺構、調査区完掘状況	16
図版3 弥生土器	17
図版4 弥生土器、石器	18
図版5 中世土器、石器	19

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

都農町では、「豊かで活力に満ちた21世紀のまちづくり」を推進する一環として、店舗や住宅等の分散的な立地が進行している明田地区を基盤施設の後発的な整備ではなく、次世代のための積極的な健全市街地を形成することにより、幹線道路や歩道、排水溝等の公共施設の整備改善、宅地の利用増進を図り、地域住民に貢献するとともに、将来への展望を示すことを目的として、平成元年度より中部区画整理事業を企画してきた。特に平成4年度は、幹線道路整備予定地を中心に町長部局と協議し、文化財の有無の確認を行うこととなった。

幹線道路整備予定地は、昭和62年度の『都農町遺跡詳細分布調査報告書』によると、森遺跡の南端に位置しており、埋蔵文化財の所在が予想された。このため、都農町長から町教育長へ文化財の所在の照会があり、町教育委員会では平成3年11月6日から7日までの2日間に試掘調査を実施し、弥生土器片、青磁片や土師器片等が出土した。

以上の調査結果から弥生時代及び歴史時代の遺跡が所在することが確認された。

町教育委員会では、試掘調査の結果に基づき、町長部局と遺跡の保護について協議を重ねたが、事業施工上、遺跡の大部分が現状で保存することが困難であったため、工事着手前に町教育委員会が発掘調査を平成4年7月6日から同年8月31日まで実施するに至った。

## 第2節 調査の組織

総 括	都農町教育委員会	
	教 育 長	守 部 寛
	社会 教育 課 長	黒 木 正 浩
	社会 教育 課 長補佐	河 野 吉 孝
庶務・会計	社会 教育 課 主事	村 中 日 登 美
	都市計画課主査	黒 木 賢 子
調査担当	社会 教育 課 主事	吉 永 真 也

調査協力 宮崎県教育庁文化課  
埋蔵文化財係主査 石川悦雄  
同主任主事 谷口武範

発掘作業員 黒木初美、河野吉夫、九鬼武夫、河野良雄、岩本すみよ  
長友英夫、西尾富子、黒木房子、田中夏代、吉井健一朗

発掘調査にあたっては、連日炎天下の中作業に参加していただいた地元の方々をはじめ、調査に深いご理解をいただいた関係者の方々に対して記して感謝します。

## 第2章 遺跡の立地と調査概要

### 第1節 立地と環境（第1図）

都農町内の遺跡は心見川、都農川、名貫川流域に分布している。

旧石器時代の遺跡としては京塚遺跡（大字川北字京塚・藤見尾ノ下）、又猪野原遺跡（大字川北字又猪野原・又猪野）がある。

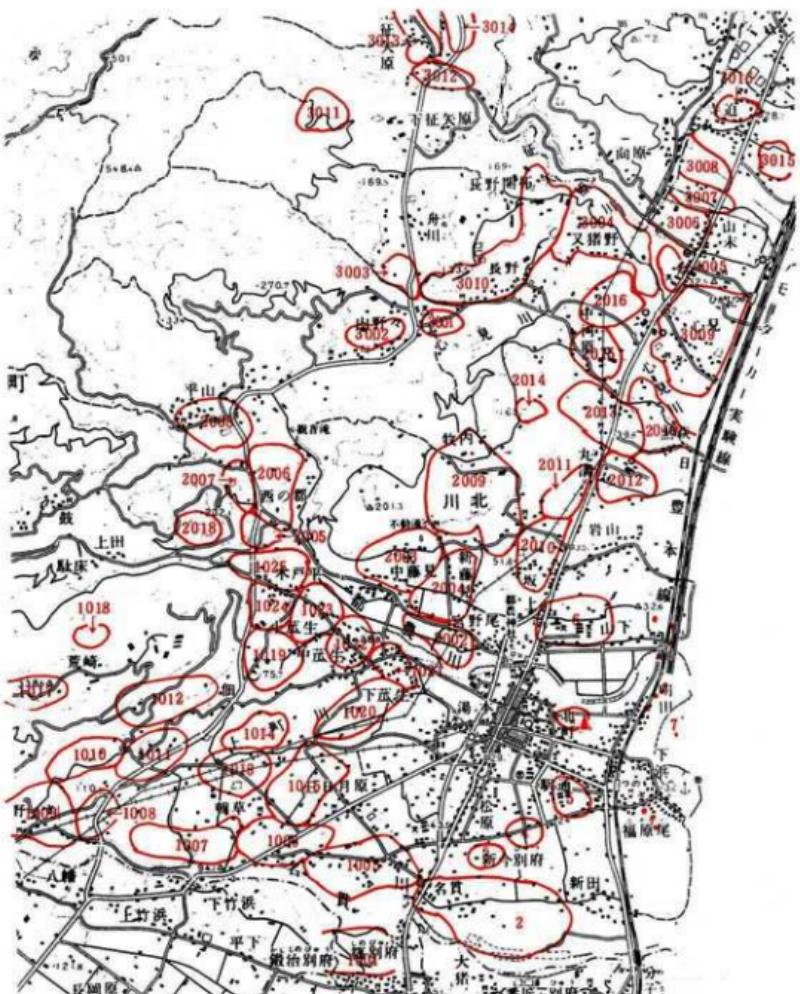
縄文時代の遺跡は竜ヶ平第1遺跡（大字川北字竜ヶ平）、黒石遺跡（大字川北字黒石）、舟川中原遺跡（大字川北字舟川中原）、三日月原遺跡（大字川北字三日月原）がある。

弥生時代の遺跡には境ヶ谷第1遺跡（大字川北字境ヶ谷）、木戸平遺跡（大字川北字木戸平）がある。境ヶ谷第1遺跡では2軒の堅穴住居が確認され、鉄器（鎧）も出土している。また昭和64年と平成3年には隅丸方形プランの周溝状遺構がそれぞれ1基づつ確認されている。

古墳時代の遺跡は平山遺跡（大字川北字平山・大丸）、西ノ郡遺跡（大字川北字西ノ郡）がある。

森遺跡は、児湯郡都農町大字川北4515番地外（都農町大字川北字森）に所在する。

この地域は牧内台地（標高201m）から東の海岸に向かって緩やかに延びる丘陵の途中に位置する明田地区に所在する。この明田地区の西側一帯には都農の市街地が



第1図 森遺跡周辺の分布図

1. 森遺跡(▲) 2. 新別府下原遺跡 3. 新別府遺跡 4. 新別府肥遺跡  
5. 福原尾遺跡 6. 中原遺跡 7. 都農古墳群(・)

1001	篠別府遺跡	1023	上芦生遺跡	2017	松ヶ鼻山遺跡
1005	新別府川原遺跡	1024	木戸平第1遺跡	2018	井手ヶ平遺跡
1006	下原遺跡	1025	木戸平第2遺跡	2019	上黒萩遺跡
1007	竜ヶ平第1遺跡	1027	相見遺跡	3001	内野下原遺跡
1008	竜ヶ平第2遺跡	2002	師丘田遺跡	3002	内野遺跡
1009	立野遺跡	2003	京塚遺跡	3003	舟川中原遺跡
1010	尾立遺跡	2004	黒石遺跡	3004	又猪野原遺跡
1011	俵石第1遺跡	2005	川神田遺跡	3005	心見住邊上遺跡
1012	俵石第2遺跡	2006	西ノ郡第1遺跡	3006	山末大原第1遺跡
1013	朝草原遺跡	2007	西ノ郡第2遺跡	3007	山末大原第2遺跡
1014	湯牟田遺跡	2008	平山遺跡	3008	宮川遺跡
1015	榎土手遺跡	2009	白水遺跡	3009	心見遺跡
1016	後谷遺跡	2010	境ヶ谷第1遺跡	3010	長野遺跡
1017	芦生尾立第1遺跡	2011	境ヶ谷第2遺跡	3011	舟川尾立遺跡
1018	芦生尾立第2遺跡	2012	久次牟田遺跡	3012	下征矢原遺跡
1019	馬場口遺跡	2013	白石第1遺跡	3013	上征矢原遺跡
1020	中河原遺跡	2014	白石第2遺跡	3014	東平遺跡
1021	鍛治屋敷遺跡	2015	旧牧跡第1遺跡	3015	寺迫下原遺跡
1022	鹿牟田遺跡	2016	旧牧跡第2遺跡	3016	中村遺跡

第1表 遺跡地名表

広がり、人口密集地に隣接している。遺跡はこの明田地区の西端に位置し、標高が約1.7m前後である。

当遺跡の周辺には、南に弥生～古墳の福原尾遺跡（大字川北字福原尾）、新別府肥遺跡（大字川北字新別府肥）、新別府遺跡（大字川北字新別府）、同じく弥生～古墳の新別府下原遺跡（大字川北字新別府下原）、北に弥生～古墳の中原遺跡（大字川北字中原）、東には県指定都農古墳（大字川北字下黒萩、尾ノ鼻下、原田、福原尾、池田・・・現在11基）がある。特に南の新別府下原遺跡は、昭和63年から平成元年にかけては場整備事業に伴う発掘調査（調査面積は約14000m<sup>2</sup>）が行われており、弥生時代末の堅穴住居が7軒、周溝状造構が3基、土壙が5基検出されており、甕・壺・高杯・鉢などと共に、石庖丁・砥石・磨石・石鍤などの石器、鎌・鐵などの鉄器が出土している。<sup>(1)</sup>

#### 註

- (1) 長津宗重 「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第3集 都農町教育委員会 1990

## 第2節 基本層序について（第2図）

当遺跡では、合計5層が確認された。しかし、調査区は過去にミカンの栽培等が行われており、深いところでは約2mほどの掘り込みがあった。そのため調査区西側の壁を参考にした。基本層序は次のとおりである。

I層 耕作土	
II層 暗黒褐色粘質土層	粘質を帯び比較的かたくしまる。遺物包含層である。
III層 明橙褐色土層	鹿児島県の鬼界カルデラを噴出源（約6,400年前）とし、通称アカホヤと呼ばれる火山灰層である。
IV層 明茶褐色粘質土層	粘性がやや強くかたくしまる。
V層 黄褐色粘土	粘性が大きくかたくしまり、人頭大の礫が含まれる。

第2図 土層模式図

## 第3節 調査の概要

森遺跡（都農町大字川北字森）は、宮崎市の北北東約40kmに位置しており、町の西側に位置する牧内台地と東端の海岸の中間点で標高19mの位置に所在している。

中部土地区画整理事業に伴って都農町教育委員会が平成3年11月6日、7日の両日に試掘調査を行った結果、弥生時代から中世までの遺跡が確認されたので平成4年7月6日～同年8月31日まで約1,000m<sup>2</sup>の発掘調査を同町教育委員会が行った。

調査区は幅12m×長さ70mの幹線道路予定地だったので全体を一つの区とし、道路のセンター杭を基準に5m間隔でグリッドを設定した。

今回の調査では、弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居が1軒、時期不明の住跡が1軒が検出された。また歴史時代の溝状遺構が1基検出されている。弥生時代の竪穴住居からは土器片が約100点と磨製石器が1点出土している。また溝状遺構からは青磁片（椀）が2点、格子目文の須恵器片が2点出土している。その他では、土師器片を中心に約300点が出土している。

# 第3章 調査の成果

## 第1節 遺物と遺構

### 1. 層序

調査区は東西に走る町道（湯の本・福原尾線）の北側に所在しており、標高が約19mで、南側（町道）から北に向かって緩やかに傾斜した場所である。以前よりこの地は水田耕作やミカンの植え付け、飼料の栽培などが行われており、いたるところに掘り込みがあった。ここでの層序は次のとおりである。

I層：黒褐色土層（耕作土層）。

II層：暗黒褐色土層。16~31cm。やや粘質を持つ火山灰層で、中部から下部にかけて遺物の包含が認められる。

III層：明橙褐色土層（アカホヤ火山灰層）。19~28cm。遺構の検出が認められる。場所によっては植え付け等の掘り込みがこの層の下部まで達している。

IV層：明茶褐色土層。10~18cm。やや強い粘質を持つ火山灰層で、小礫を少量であるが含む。

V層：黄褐色土層。17~21cm。粘質の強い火山灰層で、硬くしまる。拳大から人頭大くらいまでの礫を含む。

### 2. 弥生時代の遺構と遺物

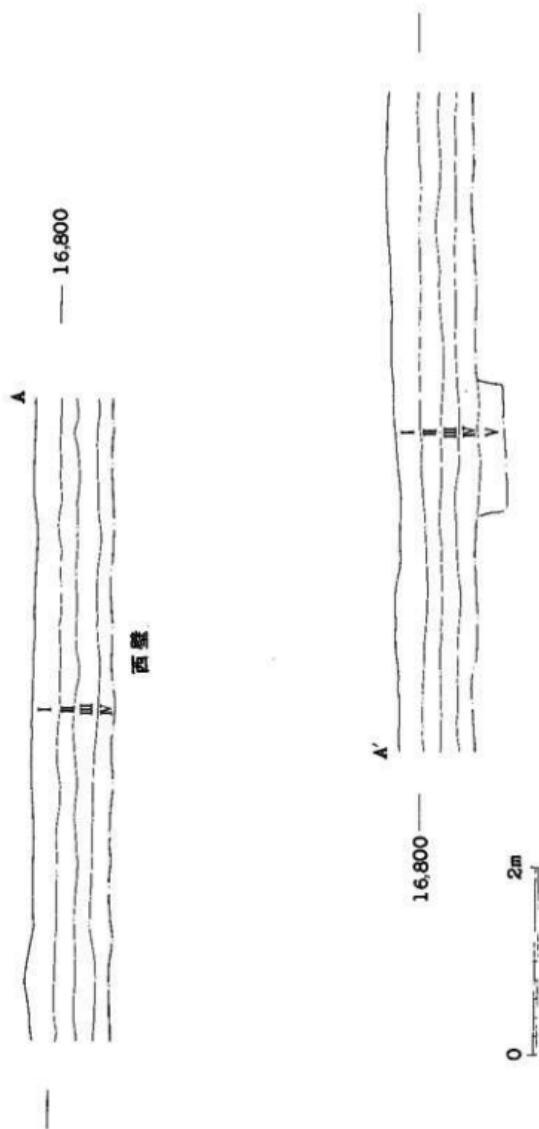
弥生時代の遺構は調査区北側から中期終末～後期初頭にかけての竪穴住居1軒（2号住居）が検出された。これは一辺が約6m、深さが19~26cmの方形プランと推測される。柱穴は1本しか検出できなかったが、位置関係から2本柱と推定される。

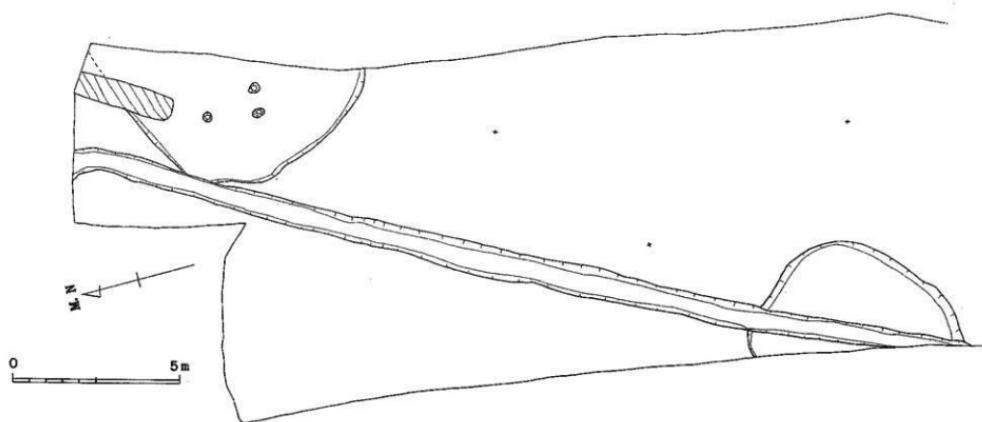
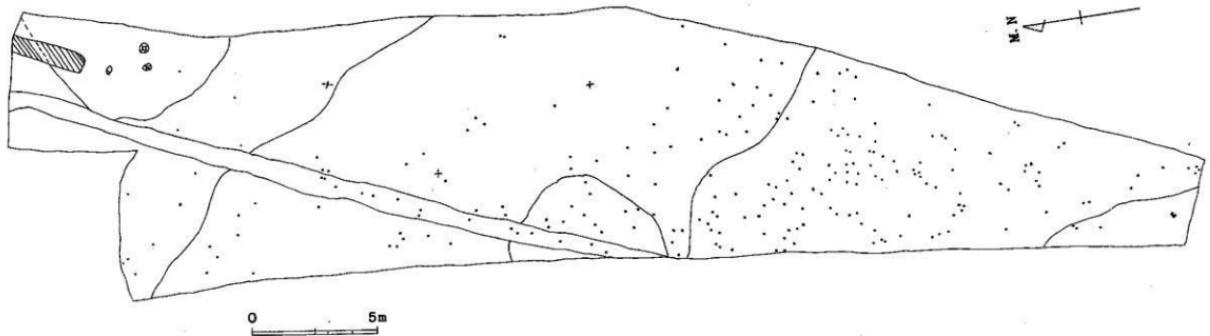
また、出土した遺物は2号住居から瀬戸内系の高坏の脚部や、口縁部が大きく朝顔状に開く壺形土器、磨製石鎌、砥石などである。

2号住居は、調査区の関係から約2分の1のみ検出できた。また、最近までの耕作による掘り込みや中世の溝により一部が破壊されており、保存状況はあまり良くなかった。長さは4.41+@m、幅5.23+@m、深さは最も深いところで26cmである。土器量は非常に少なかった。

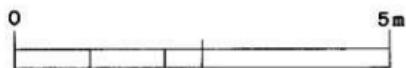
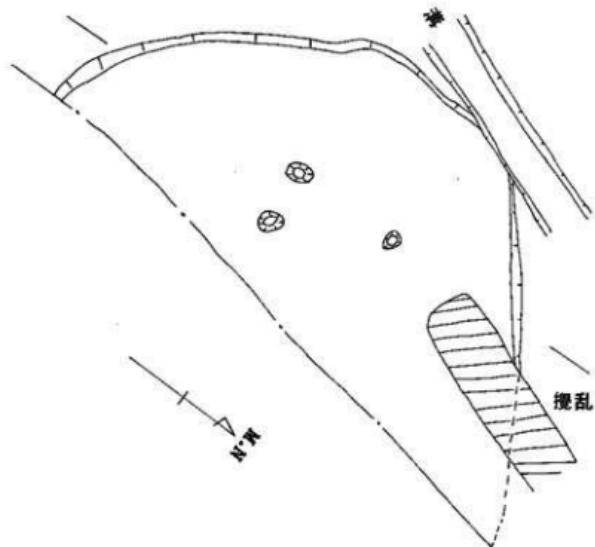
2号住居から出土した遺物は、1は口縁部が大きく朝顔状に開いた壺形土器で、口唇部外面に波状文を施している。また、頸部から肩部にかけては断面三角形の貼り付け突帯を二条施し、下部の突帯に楕円状浮文を貼り付けている。内外面ともハケメを施している。2は壺形土器の胴部で二条の突帯を有する。内外面ともヨコナデを施している。3、4は壺形土器の底部で、底径は3が6.6cmで外面はハケメを施し内面はナデを施す。4の底径は2.3cmで、内外面ともハケメを施す。5は高坏の頸

第3図 土層断面図

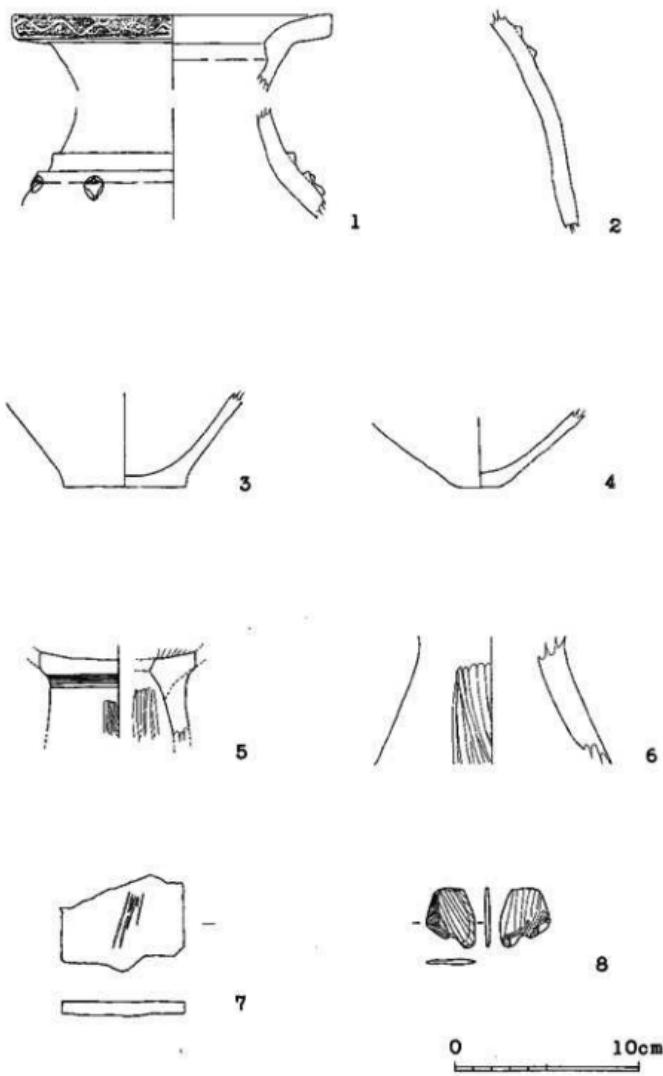




第4図 遺物・遺構分布図及び遺構配置図



第5図 2号住居実測図



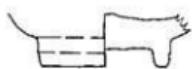
第6図 弥生遺物実測図

部から脚部にかけての部分で、頸部に三条の凹線が施され瀬戸内系土器の特徴を呈している。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデを施す。6は高坏の脚部で外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はナデを施す。7は凝灰質貢岩製の砥石で偏平縦長であったと思われる。表面に使用痕が認められ表面のみの使用である。現存長5.1cm、幅6.6cm、厚さ0.7cm、重さ39gである。8は貢岩製の磨製石鎌で頭部と片側脚部が欠損している。現存長3.2cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm、重さ6gである。

### 3. 中世の遺構と遺物

中世の遺物は調査区の北よりの位置から溝状遺構が検出された。これは長さ27m、幅80cm~1m、深さ30~35cmでほぼ真っすぐに伸びている。使用の目的は不明である。

出土した遺物は青磁片（椀）が2点、格子目文の須恵器片が2点である。9は陶器の椀の底部である。焼成はあまり良くない。10はヘラ切り底の土師器小皿である。11は青磁椀片である。胴部から頸部にかけて緩やかに膨らみながら立ち上がり、口縁部がやや外反している。口径は15.3cmである。12は青磁椀片である。緩やかに内湾しながら立ち上がっている、口径は16.3cmである。13、14は外面に格子目文のタタキを施した須恵器である。両方とも内面はナデで、格子目文の規格は2mm×3mmである。15は凝灰質貢岩で砥石として使用していたものを擦り切り技法により石材を取る母石として、あるいは別の石器に加工しなおそうとした形跡がある。長さ4.2cm、幅3.4、厚さ1.1cm、重さ23gである。



9



10



11



12



13



14



0 10 cm



15

第7図 中世遺物実測図

## 第4章 まとめ

森遺跡は弥生時代中期終末～後期初頭と中世（14～15世紀）の遺跡である。今回の調査では、約1,000m<sup>2</sup>の調査区の中に弥生時代の縦穴住居が1軒、14～15世紀の溝状造構が1本、時期不明の住居跡1軒が検出された。

### （1）弥生時代中期終末～後期初頭の遺物

弥生時代の遺物としては、口縁部が朝顔状に開き、口唇部外面に波状文を施し、頸部から胸部にかけて2条の貼り付け突帯を有し、下部の突帯には梢円状浮文を伴う壺形土器や瀬戸内系の土器と磨製石鐵・砥石などが出土した。

県内で弥生時代中期終末～後期初頭の遺跡で確認されているのは、延岡市の差木野遺跡がある。ここから出土している土器の形態等を比較すると、かなり酷似しているのでほぼ同時期とみて間違いないと思われる。

町内の弥生時代の遺跡で発掘調査されたのは、新別府下原遺跡がある。この遺跡は縄文時代後期と弥生時代中期末葉～末にかけての遺跡である。ここからは弥生時代中期の住居が5軒、弥生時代末の住居が7軒検出されている。このことから新別府下原遺跡と森遺跡はほぼ同時期に存在していたと思われる。

### （2）中世の遺構と遺物

ここから検出された溝状造構の中から、青磁碗片や須恵器片が出土している。この青磁片から14～15世紀のものであると判断できる。溝状造構については、用途の解明までなは至らなかった。

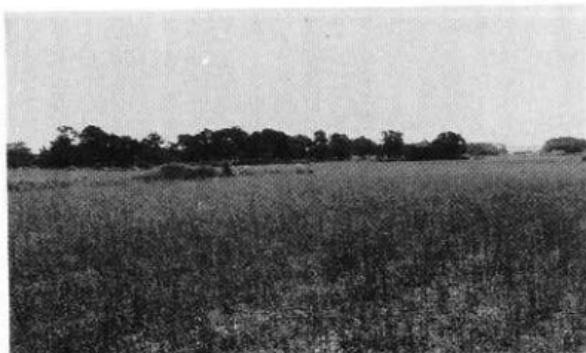
今回の調査によって弥生時代中期終末～後期初頭の集落の基本的な単位を確認するまでには至らなかったが、集落の分布等を推測する上では大きな成果があった。

### 参考文献

長津宗重 「新別府下原遺跡」 「都農町文化財調査報告書」第3集  
都農町教育委員会 1990

宮崎県 『宮崎県史 資料編 考古1』 平成元年3月31日

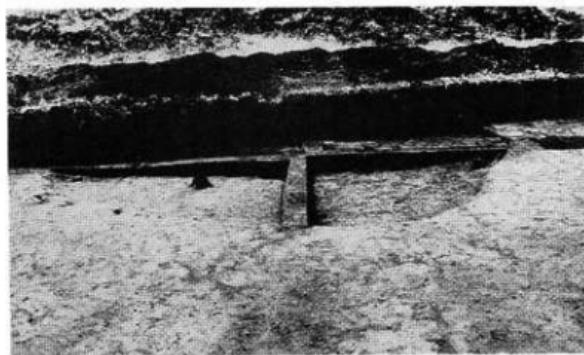
# 図 版



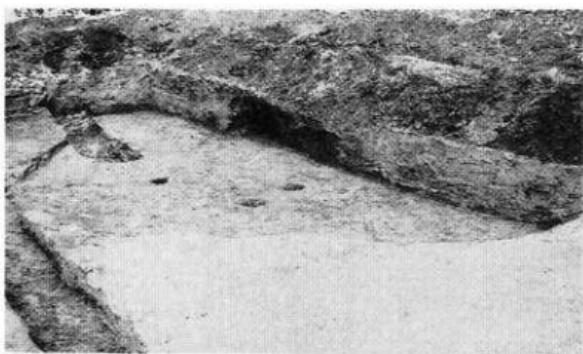
調査区近景  
(西から)



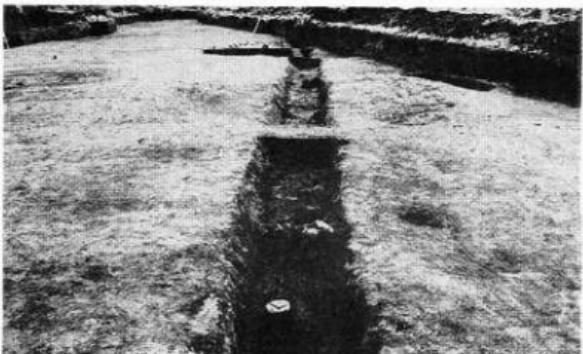
1号住居  
検出状況



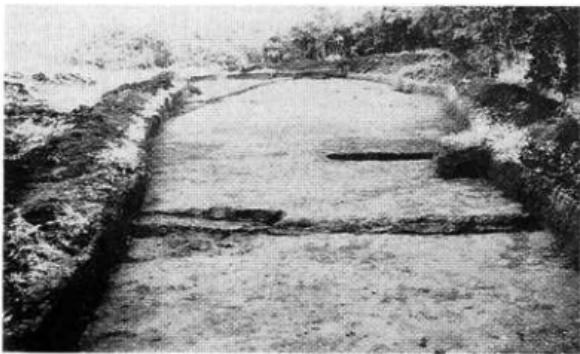
1号住居  
遺物出土状況



2号住居



溝状遺構  
遺物出土状況



調査区  
完掘状況



弥生土器  
(高坏脚部)



弥生土器  
(高坏脚部)



弥生土器  
(壹)



2号住居出土  
赤生土器



2号住居出土  
赤生土器



2号住居出土  
石器

図版 4



溝状造構出土  
中世土器  
(青磁)



溝状造構出土  
中世土器  
(須恵器)



溝状造構出土  
中世土器

都農町文化財調査報告書 第5集  
森 遺 跡

発行年月 平成5年3月31日  
編集・発行 都農町教育委員会  
印 刷 有限会社 横内印刷